令和８年度　第１期
未修者小論文試験問題

受験上の注意事項

1　監督者の指示がある前に、この問題を開くことを禁止します。

2　試験開始の合図により、解答を始めてください。

3　試験開始の合図の後、印刷不鮮明等に気付いた場合は、黙って手を挙げ、監督者に申し出てください。

4　解答は、答案用紙に黒インクのペン又はボールペンにより書いてください。
　消せるボールペンや時間の経過により字が消えるボールペンは使用しないでください。また、鉛筆は不可です。

5　試験時間は90分です。
　試験開始後20分以内及び試験終了前５分間は、答案の提出及び試験室からの退出はできません。それ以外の時間に退出（途中退出）する場合には、黙って手を挙げ、自席で答案及び問題を監督者に渡してから退出してください。

6　この問題は、試験終了後、持ち帰ることができます。

7　次のもの以外は机上に置かないでください。
　受験票、筆記具、時計（計算機能等のないものに限る。）、眼鏡。
　受験票は、氏名、受験番号が記載されている面を表にして、監督者が見やすい位置に置いてください。なお、上記以外のものについては、監督者の許可を得てください。

8　問題検討のためのラインマーカー及び色鉛筆の使用は、問題用紙に限り認めます。

9　携帯電話等は、必ず電源を切って鞄等にしまってください。

10　試験室内では、耳栓の使用はできません。

11　試験時間中の発病等やむを得ない場合には、黙って手を挙げ、監督者の指示に従ってください。

12　試験時間中の喫煙や飲食（ガム等を含む。）は、禁止します。

13　試験終了の合図とともに、直ちに筆記具を置き、監督者の指示を待ってください。

14　不正の手段によって試験を受け、又は受けようとした者に対しては、試験を停止し、合格の決定を取り消すことがあります。

〔問　　題〕

次の文章を読んで、後記［設問１］及び［設問２］に答えなさい。

大学とＺ世代

――お客様化するＺ世代

そしてもう１つ、若者が依存する重要な場、特に友達と絡む場として学校（大学）が挙げられる。現代の大学はどうやら「高校化」していて、大学でも「友達離れ」ができない人は多い。次に大学生としての若者という観点から、若者と大学の関係について考えてみたい。ＳＮＳの話が当てはまるのは、別に大学生に限らない。ただここからは、特に大学生を念頭に置いて話を進める。「モラトリアム」として子どもと大人のはざまにある、社会化の過程にある若者たちを預かる大学の構造を読み取っていきたい。

大学の高校化、高校の大学化

昨今の大学をとりまく話は、だいたい景気が悪い。平成16年の国立大学法人化を境に、楽園だった大学はもうどこかに消えたと言われて久しい。カネやヒトは慢性的に不足し、少子化によって学生数も激減している。私立大学は特に学費が収入の多くを占めるので、学生の減少は経営に直結する死活問題となる。

この社会の流れに対し、大学教員として感じることがある。大学は確実に「高校化」している、ということだ。どういうことだろうか。

ほぼすべての高校（までの学校）は「クラス」をつくる。そして毎日出席を取る。つまり、生徒は管理下・監視下に置かれている。良いか悪いかはおいといて、学校教育というのはそういうものである。対して、伝統的な大学は概ね奔放であった。学生を縛らず自由にさせるという理念があり、これも良くも悪くもそういうものであった。

ところが最近の大学は、学生を管理したがる。けっこう驚かれる話があって、何かというと、最近の大学では「保護者会」が開かれることが珍しくない（私の知る限りでは私立大学に多い）。

それって「Ｆラン」みたいなとこだけでしょ？　ともよく言われるけども（失礼な言いぐさだ）、そこそこ名の知れた、偏差値の高い大学でもやっている。むろん、高校までのように義務的にほとんどの保護者が出席することはなく、希望者に限って学生についての相談や報告の機会を設けるものだ。とはいえ、「大学で保護者会」は、びっくりされることが多い。

なぜそんなことを？　学生が望んだのだろうか？　そんなワケない。保護者が望んだのだ。

なぜ？　きっと、**不安**だからだ。なお、**高校も大学化している**（この意味は、後の章で解説したい）。

大学のテーマパーク化

「大学のテーマパーク化」というフレーズがある。大学の現状を揶揄したもので、学生が大学に遊びに来ている、みたいな意味で用いられることが多い。まあ実際そうであるし、でも最近の傾向でもないと思う。老若男女問わず、「大学で勉強していた」と言う人の方が少数派であろう。現代の若者だけ叩くのはアンフェアだ。ただこの「テーマパーク化」、もう１つの意味がある。そして、そっちの意味の方がよっぽど怖くて、かつ大学生のリアルを描いている。

テーマパークといえば、ディズニーランドやＵＳＪが想起できる。それらのエンタメは、経営学の視点から見ても舌を巻くほど高度で優れている。学生たちもテーマパークの虜になっていて、１回行くだけで教科書が３、４冊買える価格のチケットでも、なけなしのお金を払ってテーマパークに向かう（教科書は、買わないか、先輩にもらって節約する）。

なぜ若者たちはテーマパークに熱狂するのだろうか。ビジネスの観点から見れば、テーマパークはかなりの設備投資を行う必要があり、要は装置にとことんお金がかかっている。その規模は鉄鋼メーカーや自動車メーカーに匹敵し、大学の比ではない。また、エンタメを徹底的に追求していて、とにかく楽しい。**不快なものが極力排除され、楽しさだけで満たされた空間**がそこにある。まさに夢の国だ。ただし、有料である。

大学のテーマパーク化とはすなわち、**大学を、不快を消し去ったとにかく楽しい場所だと見なす志向**を指す。

コロナ禍（の初期）において、ＳＮＳで「#大学生の日常も大事だ」というハッシュタグが流行った。侃々諤々の議論とも言えない議論が飛び交った。そのさなか、「結局、大学生は大学にキャンパスライフを求めてるんです。授業なんかどうでもよくて、キャンパスの青春を奪われることが許せないんです」という主張が見受けられた（余談だが、コロナ禍で大学生がときに悪者にされ、多大な犠牲を払い、社会のしわ寄せを受けたのは間違いない。どこかで清算されないといけない）。

これはまさに、大学テーマパーク説に基づいた主張だ。大学は享楽を得る場所であるわけだから、大学生のエンジョイライフを最優先すべきだ、というわけである。

「テーマパーク化」にはもう１つの含意がある。**学生を「客」に見立てている**ところだ。そもそも学生は大学に学費を払っているわけであり、その意味で顧客である。しかし、元来、学生は大学にとって客のようで客でない。テーマパークの客が（テーマパークの外で）犯罪行為をしでかしても、テーマパークが責められることはない。でも、大学生が問題を起こしたら、

大学も責められる。学生は大学の一員としての自覚と責任を求められる。お金を払っていながら組織の一員として振る舞う、不思議といえば不思議な関係である。

しかし学生がお客様になってしまうと、様々なことが成り立たなくなる。金を払ってるんだから。誰のおかげで食えてると思ってるんだ。こうした傲慢な客の論理が許されてしまうのであれば、大学ができること、やるべきことは、かなり意味内容が変わってくる。たとえば、語学で発音を直すのは失礼だ。仮に発音が間違っていようが、いい発音だね、と言って帰すのがよかろう。だって、お客さんだから。

いい子症候群の真意

本書を執筆するにあたって、かなり参考にした本がある。金間大介著『先生、どうか皆の前でほめないで下さい――いい子症候群の若者たち』である。やや若者を揶揄するきらいが強いものの（本書も人のことは言えない）、実に鋭く若者の実態を抉っていると感じた本だ。この「いい子」とは何だろうか。日常の慣用で、よく使うフレーズを考えてみよう。

「いい子にしててね」

子持ちのご家庭なら、飽きるほど思ったことがあるだろう。子どもは、特に小さい子どもは、親やオトナの意向なんて知るわけもなく、傍若無人に大暴れする。「ちびっこギャング」に疲れ果てた親御さんは、修飾語を足して、聞かない子どもに語りかける。

「頼むから、いい子にしててね」

こうした親御さんにとって、非常に強力な文明の利器がある。タブレットとYouTubeだ。お気に入りのYouTube動画を視せておけば、暴れまわる子どもたちはウソのように静かに映像に見入る。**このとき、子どもは「いい子」になる。**

ここまでは良いだろう。で、ちょっと考えてみてほしいのだ。YouTubeに見入って静かな子どもが「いい子」だという意味を。

言葉というのは多義的で、場合によって意味は異なる。年を重ねれば、親孝行をしてくれる子が「いい子」なのかもしれないし、礼儀正しく品行方正であることが「いい子」なのかもしれない。

しかしYouTubeの例で言うなら、いい子である条件はきわめてシンプルである。「**黙って座っていること**」だ。子どもが幼少期ならわかる。小さい子どもは本当に手がかかる。最近は共働きのご家庭も増えて、「頼むから」と、どれだけの親が思ったか。黙って動かない、手のかからない子どもは、心から「いい子」と言えるだろう。

しかし。いい子は、いつまでいい子なのだろう。つまり、大学の授業で「いい子」である必要はあるのだろうか。

単刀直入に言えば、筆者は授業をしていて気付いたのだ。ああ、この学生たちはもしかして、「**黙って座っていれば、いい子だと思ってる**」んじゃないかと。三つ子の魂、二十まで。高校を卒業してハタチ前後になっても、三つ子の頃のことを忘れていない。

学生たちは、ただ何もせず座っている。手も挙げず、ノートも取らず、たまにスマホをいじったり。当てても苦笑して横を見るだけだ。なのに、なぜか教室には居る。授業には来る。最初は、実に幼いと思った。正直情けない、とも。ただ、こういう性質はどこから来たのだろうと不思議にも思い、そして気付いたことがある。「いい子症候群」はきっと、小中高と積み重ねられた先生たちとの「共犯関係」の産物なのだと。

先生と学生の共犯関係

まったく余談ながら、筆者は「怖い」と言われることが多い。教育現場では、この怖さを最大限活用しており、ほどほどに威嚇しておくと学生は比較的おとなしい。ところが他の先生の話を聞いていると、授業での学生の騒ぎっぷりたるや、まあ酷いものである（ちなみに、治安と偏差値はたいして関係ない）。相手を見て振る舞いを変える狡猾さもまた、実に若者っぽい性質だ。

かつ、現代の大学、というより教育現場では、学生を安易に怒れないという問題がある。アンガーマネジメントという言葉が浸透し、人前で怒る人は異常者や犯罪者のような扱いを受ける時代だ。職場でも学校でも、若者を怒るということは忌避されており、そもそも現象として珍しくなってすらいる。

とある大学の先生は、授業態度を注意したときに言われたことがあるそうだ。

「ＰＴＡに言いつけますけど、いいんですか？」

その先生は「大学にＰＴＡはありません」とどストレートに事実だけ告げて、学生を退場させたとか。要するに、小中高では保護者に言いつけられるのが一番メンドクサイ。**この手の悪い奴らは、どうやったらオトナが嫌がるのかということをよく知っている。**

本当に先生が悪くて、保護者が出ていくべき場面も必ずある。しかし保護者カードはあまりにも強力で、火のない所に煙を立てることもできてしまう。昨今の報道の通り、小中高の先生たちはかなり疲弊している。ぶつかってでも教育する、クレームを恐れずに向き合うよりは何も起きないように振る舞うことを選んでも、正直責められない。

授業のたび騒ぐ子どもたち。キレたくなる気持ちを一生懸命に静めて、怒るまいと思いながら授業を進める先生。ふと、心に魔が差す。

「もし、授業をしないで済んだら……そして、生徒が何も言わず見過ごしてくれたら……」

このとき、先生と生徒との間に、悪魔の約定が成立する。先生はテキトーに授業する。生徒

はテキトーに流す。**ただ、黙って座っているだけ。これが、互いの幸福度を最大化する均衡点なのだ。**

むろん、疑問や義憤を持つ方もいるだろう。それは教育者として望ましくない均衡だ。それに、授業をマジメに受けたい生徒の機会を奪っている。もっともである。その通りだ。ただ、その正論を受容できない程度に、特に小中高の先生たちは疲れてビビってしまっている。

教育という「負担」

そして、この様相は大学でも似たようなものになっている。大学教員がよく使う言葉に「授業負担」「教育負担」がある。要はいくつの授業コマを担当するかという話で、「今、授業負担どのくらいですか？」とか「あの大学は教育負担少ない」とか言ったりする。**授業は負担なのである。**大学教員はどちらかといえば教育のプロではなく研究のプロだということもあって、授業を担当することを前向きに捉えている人は必ずしも多くはない印象だ。少なくとも、授業負担という言葉が成立する程度には。

もちろん教育に真摯に向き合う先生もごまんといらっしゃる（というか、ほとんどの方はとてもまじめに教育に向き合っている)。ただ、学生数の多い大学だと、自分の専門とは違う分野を担当したり、数百人が受ける授業を複数担当したり、20〜30人の卒論を１年で担当したり(！)することもある。たしかに過大な負担だ。

このような状況だと、大学でも共犯関係は成立する。先生はできるだけ手を抜く。学生はボーッと座っている。そして授業をやり過ごす。これが一番、互いにとって負担がない、Win-Winの関係。**互いに無関心であることが、互いにとって一番幸福なのである。**

あんまりだ、と思った方もいるだろう。もちろん当たり前だが、こんな先生と学生ばかりではないことも重々断っておく。でも、そんな答えを選ぶほどに疲弊した現場の状況が、互いに「都合の良い」最適解を導いていることは、重々承知されなければならない。別に悪いことをしようと思ったわけでもない。互いに無関心であるという関係は、どっちにも都合が良いので採用されただけなのだ。

でも、これはさすがにマズイ。何がマズイのかというと、小中高、大学では「いい子」がまだ成立する。だが、会社や職場では成立しない。**黙って座っているだけの社員を評価してくれる会社など、ない。**「リアリティショック」に直面した若者が、きっといるはずだ。

「おかしいなあ。今までは、黙って座ってるだけで、みんな許してくれたのに。この会社は違うようだ。ブラック企業なのかな？」

（舟津昌平『Ｚ世代化する社会　お客様になっていく若者たち』46頁〜56頁（東洋経済新報社、2024年)）

［設問１］（100点）

本文の内容を400字以内で要約しなさい。

［設問２］（200点）

本文で述べられている「いい子」がロースクールやビジネスの場面で直面する問題点を考え、そのことについてのあなた自身の見解を600字以内で述べなさい。